

# 『アエネーイス』結末場面における「好機」\*1

高橋宏幸

## I はじめに

ウェルギリウス『アエネーイス』という作品を理解するために結末場面の解釈が他のなによりも重要であることはほとんど疑いがない。同時にしかし、この場面が作品中にもっとも解釈困難な箇所であることもまた確かである。宿敵トゥルヌスが腿の中央を投げ槍で貫かれ、大地に倒れ伏したまま、敗北を認める嘆願をすると、アエネーアースは少しの躊躇ののち、トゥルヌスがパッラスから奪って身に着けていた剣帯に気づいて激しい怒りに燃え、止めの一撃を加える。トゥルヌスの命が無念とともに散ったことを語って詩全編が終わる。結びというには唐突にすぎる印象、「ローマ建国」という主題が国の未来を展望しているとするなら、そうした建設的雰囲気をもほとんど感じさせない陰鬱な情調、なによりも、「ローマ人よ、忘れるな…… 従う者には寛容を示し、傲慢な者とは最後まで戦い抜け」(6.851, 853) というアンキーセースの教えに反する、つまり、英雄が寛容の心を投げ捨てただけでなく、それによって父の忠告を軽んじることで自身の資質であるピエタースに背く行為に及んでいるというある種の自己矛盾、これらの点に発して、議論は一致点を見出し難い状況を脱していない。

論者自身は先に、作品後半の「戦争」において基軸をなしていると思われる「非情」(sacuitia) および「遅延」(mora) というモチーフ、加えて、戦いへ逸るトゥルヌスの「凶暴な血気」(uiolentia) に着目し、次のような解釈を提起した\*2。

まず、戦場での「非情」が「命まで奪う仮借なさ」と言い換えられるなら、それは誰よりも武勇で他を圧倒するアエネーアースによって体現され、それは宿敵トゥルヌスを討ち果たす結末場面でクライマックスを迎える。しかし、血気に逸るトゥルヌスにとっての「非情」とは、命を奪われることはではなく、武勇の誉れを得られずにおめおめと生き長

\*1 本稿は当初、2010年10月16日に京都大学文学部で開かれたフィロロギカ第9回研究集会における「ウェルギリウス『アエネーイス』における fortuna/Fortuna」と題した発表をもとに同名題目で投稿されたが、査読者の指摘を受け、論旨を明確にすべく、焦点を絞って全面的に書きあらためた。査読の労をとってくださったお二方にこの場を借りて感謝申し上げたい。なお残る不備、誤謬があれば、論者の責任である。

\*2 拙稿「『アエネーイス』における非情」、『西洋古典学研究』51(2003), 94-106。

らえることであり、アエネーアースとの決戦に「躊躇」(mora)はない。

ところが、ユーノーがラティウムに戦争を引き起こした目的は、運命の実現に「遅延」(mora)を加え、それまでの間にトロイア、ラティウム双方に多大な犠牲を払わせることにあるので、決着を先延ばしするため、繰り返しトゥルヌスをアエネーアースとの一騎打ちから遠ざけ、彼の延命を図る。それは不必要な犠牲者を増やすとともに、背信行為を重ねる罪深い策謀である。

こうした後半の展開を踏まえて結末場面を見直すとき、トゥルヌスが自分の命よりも誉れある死を欲した願望に合致した響きは、「命乞い」とも見える嘆願のうちにも認められる。しかし、アエネーアースの立場では、「遅延」の背後の神格の策動を知りえず、背信行為の張本人はトゥルヌスであると見なし、「命乞い」も実は「遅延」の策謀と断じた。それゆえ、「遅延」をここで断ち切るため、罪業への激しい怒りを込めて止めの一撃が加えられた。トゥルヌスに対するアエネーアースの「誤解」に呼応するように、「止め」が実は不要であったと推測させる叙述がある。すなわち、トゥルヌスを大地に沈めた槍は必殺で、その傷も致命的であったと読める。そうであれば、もし「止め」がなく、いま少し時間が経てば、槍の傷でトゥルヌスは名誉の戦死を得るとともに、嘆願も、トゥルヌスは致命傷を自覚していたらうから、命乞いを意図していなかったことが判明していたはずである。しかし、これを見きわめる余地は「止め」によって奪われ、あたかも真相を闇に葬るかのような結末となった。

この解釈には一定の有効性があると論者は信じているが、もちろん、すべてを尽くしているわけではない。とりわけ重要と思われるのは、トゥルヌスがディーラによって本来の力を奪われたのを見て、

cunctanti telum Aeneas fatale coruscet,  
sortitus fortunam oculis, et corpore toto  
eminus intorquet. (12.919–921)

たじろぐ彼(トゥルヌス)にアエネーアースは運命の槍を振りかざす。めぐってきた好機をその目に捉え、全身の力で遠くから投げつける<sup>3</sup>。

と語って結末を導く叙述での「好機」(fortunam 920)に十分な考慮が払われなかったことである。この fortuna という語に注目する理由は主に二つある。

一つは作品冒頭部分との対応である。シキリアからイタリア本土を目指したアエネーアース一行が、ユーノーの介入により、嵐に遭ってカルターゴの岸に漂着したあと、そ

<sup>3</sup> 訳は岡・高橋訳(京都大学学術出版会 2009(第3刷))を用い、引用の脈絡により適宜字句を調整した。

れを見たユピテルに対してウェヌスは、

‘nunc eadem fortuna uiros tot casibus actos  
insequitur. quem das finem, rex magne, laborum?’ (I.240–241)

「いまも勇士たちの境遇は同じです。幾多の不幸を忍んだあとも、なお迫害されています。偉大な王よ、いかに終わらせるのか、この苦難を。」

と訴えた。ここには、英雄の血筋を引くローマ人が世界を支配する日が来るという約束にもかかわらず、トロイア陥落とそれに続く放浪という、一向に変わらない苦難の状況が *fortuna* という語で表わされている。*fortuna* によるこれらの詩句が関連しているとなれば、作品冒頭においては終わりの見えない状況であったものが結末では大きく変化することを示唆するように見え、それは作品全体に関わる変化であることが予想される。

もう一つは、作品中に 60 あまりを数える *fortuna* の用例のうち、アエネーアース、ディードー、トゥルヌスについてのみ、それぞれを指示する所有人称詞を付したものが 1 例ずつ見られる<sup>\*4</sup> ことである。このことから、この語が主要な登場人物三者の描かれ方に深く関与していることが予想される。

そこで本稿は、まずアエネーアース、ディードー、トゥルヌスの場合に主眼を置きながら、作品に特徴的と思われる *fortuna* の含意を観察し、その結果を踏まえて結末場面の「好機」について検討し、上記拙論解釈の補論とすることを意図する。

## 2 苦難としての *fortuna*

『アエネーイス』の中で *fortuna* は、上に引用したウェヌスの嘆きにおける場合のように、苦難の状況を表わすことが多い。ここで注意すべきは、「窮境」をただちに明示する例<sup>\*5</sup> の他に、それが用いられる時点では幸せな境遇を表わしていても、後には悲運の状況に転じる例がかなり見られることである。たとえば、カルターゴの城市を前にしてアエ

<sup>\*4</sup> ディードー、トゥルヌスの例 (4.434, 12.694) については後述。アエネーアースの例は、「そなたは災いに怯むな。いつそう果敢に立ち向かえ。そなたの運の女神が進ませてくださいであろう」(tu ne cede malis, sed contra audentior ito, | qua tua te *Fortuna* sinet. 6.95–96) というシビュラから英雄への忠告に現れる。この箇所については、qua は 9 世紀の写本の修正書き込みに現われるのみで、諸写本の他、Sen. Ep. 82.18, Serv. ad loc. も quam と読んでいる、という問題があるが、quam の読みが含意する「運命への反抗」は作品の性格にそぐわないと見る現在の諸校本の理解 (cf. Svennung, J., Vergil, Aeneis 6,96. *Erano* 54 (1956), 195–201) に従う。

<sup>\*5</sup> 1.240 (Aeneas: cit. supra), 1.517 (Troiani), 1.628 (Dido: cit. infra), 2.350 (Aeneas), 3.609 (Achaemenides), 4.434 (Dido: cit. infra), 5.356 (Salius), 6.62 (Troia), 6.535 (Aeneas), 6.615 (scelerati), 7.559 (bellatores), 10.107, 112 (bellatores), 12.593 (Latini)。

ネーアースは「おお、幸せな者たち、すでに立ち上がる城壁をもつ人々よ」(‘o *fortunati*, quorum iam moenia surgunt!’ I.437) となかば羨望をもって眺め、

quae *fortuna* sit urbi  
artificumque manus inter se operumque laborem  
miratur (I.454–56)

都の繁栄ぶりを示すように、工匠たちが互いに腕前を競い、精魂込めた作品に感嘆していた。

と語られる。しかし、この「幸運」はディードーの悲劇によって激しすぎるほどに暗転する<sup>6</sup>。

このような含意は、Fortuna と表記する擬人的表現例において、いつそう強い印象のもとに現れる。第 5 歌から例を引こう。歌の冒頭でカルターゴーから出帆したアエネーアースの船団が近づいた嵐を見て、舵取りのパリヌールスが

‘superat quoniam *Fortuna*, sequamur,  
quoque uocat uertamus iter.’ (5.22–23)

「力は運の女神が上だ。われわれはそのあとに従おう。どこへでも女神の呼ぶところへ進路を転じよう。」

とアエネーアースに進言した。こうしてシキリアへ一時避難したこと自体は無理強いされた選択であったが、結果的に父アンキーセースのために一周忌法要の機会を与えたので、それが運の女神の意向であったとすると、このとき運の女神は好意的であったと見られる。実際、法要競技祭は順調に進められ、最後にはイウールス率いる少年騎馬隊の演技が明るい未来を展望させもした。ところが、

hinc primum *Fortuna* fidem mutata nouauit.  
dum uariis tumulo referunt sollemnia ludis,  
Irim de caelo misit Saturnia Iuno (5.604–606)

このとき初めて運の女神が心変わりして信義に背いた。人々が墓前でさまざまな競技を厳粛に奉納しているあいだに、サートウルヌスの娘なる女神ユーノーは天より

<sup>6</sup> 9.41, 240, 282 をも参照（これらについては後述）。また、カルターゴーと同じく、都の盛運が減したことを示す *fortuna* の用例はトロイア (3.16) とアルデア (7.413)、つまり、アエネーアースとトゥルヌスの祖国について見られ、いずれも *fortuna fuit* という表現が使われている。この同じ表現をウエヌスは第 10 歌冒頭の神々の会議の場でアエネーアース率いるトロイア人について用いる (10.43)。あたかも、やがて未来に訪れるローマの盛運が過去のものとなったかのように述べる逆説表現であると思われる。

イーリスを遣わし、……

という叙述に導かれて、放浪に倦み疲れた女たちの手によって艦船に火がかけられるという暗転が導かれる。

また、第2歌では、木馬の策略によってトロイア陥落の運命は動かないにもかかわらず、「運の女神」は反撃に出たアエネーアースを含むトロイアの将兵に味方する。

ignarosque loci passim et formidine captos  
sternimus; aspirat primo *Fortuna* labori.  
atque hic successu exsultans animisque Coroebus  
'o socii, qua prima' inquit '*Fortuna* salutis  
monstrat iter, quaque ostendit se dextra, sequamur:  
mutemus clipeos ...'

(2.384-389)

土地に覚えがなく、恐れに囚われた者どもをいたるところでわれわれは薙ぎ倒す。運の女神も最初の苦闘に順風を送る。ここに、成功に勇気を得て小躍りしながら、コロエブスが「戦友諸氏よ」と言った。「運の女神が最初に救いの道を示すところへ、女神が幸先よく現れたところへつき従おうではないか。盾を取り替えよう……。

こうしてギリシア兵を装った彼らはわずかの成功を得るものの、カッサンドラを連れ去ろうとする敵の隊列へ突撃したとき、味方からも矢玉を浴びる皮肉な結果となったうえに、ついには姑息な策略も露見して、アエネーアース以外の誰もが討ち取られた。「運の女神」の風向きはまったく逆になった\*7。

これらの例からは、*fortuna* は人の期待を裏切るもの、という表象が浮かびあがる。第5歌では「心変わりして信義に背いた」(*fidem mutata nouauit* 5.604) という詩句がそのことを端的に示している。第1歌でのウェヌスの嘆きもこのことと無関係ではなからう。アエネーアースの艦船がシキリアをあとにしたからには、少なくとも放浪の苦難は間もなく終わるものと思われた。苦境の改善する期待を裏切られたことが「いまでも同じ境遇」(*nunc eadem fortuna* 1.240) という言葉ににじんでいる。

この表象が結末場面での「好機」と関連しているとすれば、そこには今度こそ苦難を終わらせる決着が見られるのか、それとも、またしても期待が裏切られるのか、という緊張が醸し出されるように思われる。ただ、ここでは指摘だけにとどめ、あとに立ち返ることとしたい。

\*7 Cf. 11.427.

アエネーアースの場合、そのように（結末場面にいたるまで）苦難の状況はずっと変わらず続くが、作品中にはそれが過去のこととして語られる場合もある。たとえば、第3歌、アエネーアースはヘレヌスとアンドロマケーとの別れに際して、

‘*uiuete felices, quibus est fortuna peracta*

*iam sua: nos alia ex aliis in fata uocamur.*

*uobis parva quies: nullum maris aequor arandum ...*’ (3.493-495)

「幸せに暮らしてください。あなた方は味わうべき不運をすでに嘗め尽くされた。だが、われわれは次から次と運命に呼ばれて行く。あなた方は平安を得た。漕ぎ進まねばならぬ海原はない。」

と二人に告げる。ここでは、*fortuna* に含意された苦難の状況が、完了時点から振り返られたときに、ある充足感とともに眺められている\*8。苦難がすべて終わったいま、これからの二人には幸せに満ちた生が期待され、そうあるように願われている。このような場面は、対比によって、苦難の中で生き続けねばならないアエネーアースの運命をいっそう際立たせるのに与っていると思われるが、この点で興味深いのは、カルターゴー漂着直後にアエネーアースが身も心も疲れ果てた仲間に向かって

‘*O socii (neque enim ignari sumus ante malorum),*

*o passi grauiora, dabit deus his quoque finem.*

...

... *forsan et haec olim meminisse iuuabit.*’ (I.198-199, 203)

「友よ、われわれはこれまでに不幸を知らずにきた者ではない。ああ、もっと辛いことにも耐えたのだ。これにも神は終わりを与えよう…… おそらくいつか、このことも思い出して喜ぶときが来るだろう。」

と言って励ます言葉である。「これにも神は終わりを与えよう」(*dabit deus his quoque finem* I.199) という句は「いかに終わらせるのか」(*quem das finem?* I.241) というウエヌスの嘆きと響き合っている。「終わり」に辿り着けさえすれば、喜びを感じもしようが、アエネーアースの場合には、そこへいつどのように至れるのか見えていない。

さて、以上のような苦難の状況を表わす *fortuna* の含意はアエネーアースとデュードーの関係、とりわけ、二人の共通点と相違点を描き出すことに与っていることが認められる。

\*8 このモチーフ自体は常套的と言える (cf. Austin, R. G., *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Primus*. Oxford 1971, ad I.203)。作品中の類例として、cf. 4.653 (Dido, cit. infra), 6.639 (Elysium), II.416 (Turnus, cit. infra)。

アエネーアースの苦境がいつまでも変わらぬことと呼応するように、

‘me quoque per multos *similis fortuna* labores  
iactatam hac demum uoluit consistere terra;  
non ignara mali miseris succurrere disco.’ (I.628–630)

「私の境遇も似かよっています。多くの苦難に翻弄されてから、ようやく、この地に定住できました。私は不幸を知らぬ者ではない。惨めな人々を助ける心得があります。」

と言って、ディードーはアエネーアースに援助を約束する。この確約を得る前にアエネーアースは

o sola infandos Troiae miserata labores,  
quae nos, reliquias Danaum, terraeque marisque  
omnibus exhaustos iam casibus, omnium egenos,  
urbe, domo socias, grates persolvere dignas  
non opis est nostrae, Dido, nec quidquid ubique est  
gentis Dardaniae, magnum quae sparsa per orbem.  
di tibi, si qua pios respectant numina, si quid  
usquam iustitiae est et mens sibi conscia recti,  
praemia digna ferant. (I.597–605)

「おお、トロイアの忌まわしい苦難を憐れむただ一人の方よ、われわれはダナイー人から逃れて生き残った者、陸と海であらゆる災難を嘗め尽くし、すべてのものを失った。都と家を分かち与える方よ、ふさわしい報恩を果たす力はわれわれにはありません。ディードーよ、どこにどれほどのダルダニアの民があらうと、広大な世界に四散したのですから。神々に願います、敬虔な人々に注ぐ神の目があるなら、どこかに正義なるものがあり、正義を忘れぬ心があるなら、あなたがふさわしい報いを得ますよう。」

と語っていた。英雄の窮状に手を差し伸べるディードーの行為は神々が尊ぶピエタースを具現するものと理解され、したがって、ディードーは苦境の経験という共通点を通じて、英雄の資質をも共有していると見られる。

そこで、二人が惹かれあうことには、ウェヌスやユーノーの介在という外因以外に、内的要因が認められる。この二人の関係が破綻したとき、それが修復不可能であることを悟りながら、ディードーは妹アンナに託す言葉の中で次のように言う。

‘non iam coniugium antiquum, quod prodidit, oro,  
nec pulchro ut Latio careat regnumque relinquat:  
tempus inane peto, requiem spatiumque furori,  
dum *mea* me uictam doceat *fortuna* dolere.’ (4.431-434)

「もはや結婚は過去のもの、あの男が裏切ったもの、それをわたしは願わぬ。美しいラティウムを見限り、王国を見捨てよ、とは言わぬ。ただ、空しく過ぎる時間が欲しい。狂おしい熱情を鎮める間が欲しい。そのあいだに、これがわが運、敗れた心は痛みを負うものと学べようから。」

いまやディードーの *fortuna* は彼女一人のもの (*mea* 434) となった。英雄と女王が分かち合っていた *fortuna* はもはや消え去り、孤独の苦境 (*me uictam* 434) ばかりが残ったかのようである。アンナの仲立ちも不首尾に終わり、ディードーは自殺の決意を固め、

‘uixi et quem dederat cursum *Fortuna* peregi,  
et nunc magna mei sub terras ibit imago.’ (4.653-654)

「私の一生もこれまで。運の女神がくれた道のりを私は歩き通した。いまこそ、私の大いなる霊が大地の下へ向かうとき。」

と自分に言い聞かせる。ここには上に触れた苦難の状況の「終わり」が表現されており、実際、先に引用したアエネーアースがヘレヌスとアンドロマケーに語った別れの言葉の場合と共通した語彙が用いられている。すなわち、「運」ないし「運の女神」の与えたもの (*fortuna* 3.493, *quem dederat cursum Fortuna* 4.653) が「完了」(*peracta iam sua* 3.493f., *peregi* 4.653) を迎え、新たな生を始める (*uiuete* 3.493) にせよ、生を終える (*uixi* 4.653) にせよ、アエネーアースとは異なる方向へ歩みが踏み出されている。この点で、ディードーの最期はたしかに悲劇的でも、そこには苦難の生をまっとうした充足感がある<sup>9)</sup>。それとは対比的に、アエネーアースは苦難を生き続ける。

### 3 fortuna をめぐるトゥルヌスの見誤り、アエネーアースとの対比

「戦争」が描かれる作品後半では、当然のことながら、*fortuna* はほとんどが武運と関わる含意を担う。この武運について、アエネーアースとトゥルヌスの態度が対照的であるこ

<sup>9)</sup> Cf. Sen. *Ben.* 5.17.5, *Ep.* 12.9, 61.4; Austin, R. G., *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Quartus*. Oxford 1955, ad 4.653.

とは、いよいよトロイア、ルトウリー両軍の戦闘が始まる第9歌の叙述冒頭から示されている。ユーノーの差し向けたイーリスが

‘Turne, quod optanti diuum promittere nemo  
auderet, uoluenda dies en attulit ultro.’ (9.6-7)

「トゥルヌスよ、そなたが願っても、神々のどなたも敢えて約束しないことを、見よ、時のめぐりがひとりでに届けてきた」

と切り出し、アエネーアースが留守の隙を突け、と促すと、トゥルヌスは絶好の機会を逃すまいとトロイア陣営に押し寄せる。しかし、トロイア側は応戦せずに籠城する。その理由は、

namque ita discedens praeceperat optimus armis  
Aeneas: si qua interea fortuna fuisset,  
neu struere auderent aciem neu credere campo;  
castra modo et tutos seruarent aggere muros. (9.40-43)

これこそ、戦術に長けたアエネーアースが出発のときに残した指図で、留守のあいだにその機があっても、戦列を組み、戦場に賭ける拳に出てはならぬ、ひたすら、防塁のうしろで陣営と城壁を無事に守れ、と言いつけていた。

というところにあった。アエネーアースは果敢な行動を戒め (neu auderent 9.42)、武運を試すことに慎重である。英雄はまた、第12歌、決戦に向かうときに息子イウールスに

‘disce, puer, uirtutem ex me uerumque laborem,  
fortunam ex aliis. nunc te mea dextera bello  
defensum dabit et magna inter praemia ducet.’ (12.435-437)

「わが子よ、私からは武勇と真の苦難を学べ。幸運は他の者から学ぶがよい。いま、私の右手がおまえを戦場で護る盾となり、大いなる報賞へと導くだろう。」

と言いつけた。この言葉からは fortuna への否定的な態度が見て取れる<sup>\*10</sup>。

それに対して、トゥルヌスはイーリスの訪れたときに「勇猛な」(audacem 9.3)<sup>\*11</sup>と言われ、彼が焼き払おうとしたトロイアの艦船が海のニンフに変身する異兆を目にしても「勇

<sup>\*10</sup> この箇所の解釈については、拙稿「ウェルギリウス『アエネーイス』後半における苦難の終わりと始まり」、専修大学言語・文化研究センター『Anglo-Saxon 語の継承と変容——中世英文学——』第1巻、専修大学出版局2009、120-124をも参照。

<sup>\*11</sup> Cf. 7.409, 475; Hardie, P., *Virgil Aeneid Book IX*. Cambridge 1994, ad 9.3.

猛なトゥルヌスの自信は消えなかった」(non audaci Turno fiducia cessit 9.126)\*<sup>12</sup>と語られる。このように己の武運を信じて果敢に行動するトゥルヌスの態度は「運の女神は勇猛なる者を助ける」(audentis Fortuna iuuat 10.284)という彼自身の言葉に端的に示されている。

しかし、『アエネーイス』の中で、勇猛であることによって武運に恵まれることは少なく、むしろ、悲劇的結果に終わるほうが多い。ニーススとエウリュアルスはルトウリー一軍の包囲の抜け道を見つけたとして幕舎に赴き、

‘si *fortuna* permittitis uti  
quaesitum Aenean et moenia Pallantea,  
mox hic cum spoliis ingenti caede peracta  
adfore cernetis.’ (9.240–243)

「この機に乗じる許しをいただき、アエネーアースをパッランテーウムの城市に捜すことがかなえば、すぐにもここに、大殺戮を果し、戦利品を携えて戻り来る姿をお見せしよう」

と訴える。この申し出を老練のアレーテースが絶賛し(9.245–256)、イウールスも「わが身に備わるかぎりの運と信頼をそなたらの胸にあずける」(quaecumque mihi fortuna fidesque est, | in uestris pono gremiis 9.260f.)と言って後押しし、多大な報賞の約束をする。これに対してエウリュアルスは、

‘me nulla dies tam fortibus ausis  
dissimilem arguerit; tantum *fortuna* secunda  
haud aduersa cadat.’ (9.281–283)

「いつの日にも、私がこのような勇猛果敢な行為に似合わぬ者と非難されはしませんまい。それにはただ、運が追い風となり、逆風を吹きつけねばよい」

と応じ、報賞よりも、なにかのときには残された母を頼む、それがかなうなら、「なお勇ましく向かおう、どのような危地へも」(audentior ibo | in casus omnis 9.293f.)と述べた。

しかしながら、二人のこの勇ましい行為(audendum dextra 9.320)は実を結ばず、若い命を戦場に散らすこととなった。結果的には、果敢な行動と運試しを戒めたアエネーアースの指示に背き、その代価を払った形となっている。

\*<sup>12</sup> Cf. 10.276.

パッラースはトゥルヌスに対峙したとき、「運に恵まれるかもしれぬ、勇猛果敢であれば、力ではかなわずとも」(si qua fors adiuuet ausum | uiribus imparibus 10.458f.) と心に期して自分から先に槍を投じるが、それも空しく討ち取られる。また、父メゼンティウスの助太刀に入ったラウススにアエネーアースは「どこへ急ぐのだ、死にゆく者よ。おまえの勇氣には力がともなわぬ」(quo moriture ruis maioraque uiribus audes? 10.811) と叱咤し、それを聞いてラウススは「なお勇み立つ」(nec minus ille | exultat 10.812-813) が、アエネーアースの剣の一撃によって「ラウススの最期の糸を運命の女神らが摘み取る」(extrema Lauso | Parcae fila legunt 10.814-15) ことになる。

そこで、「運の女神は勇猛なる者を助ける」(audentis Fortuna iuuat 10.284) というトゥルヌスの言葉は格言的表現<sup>\*13</sup> として一般的に通用するとしても、『アエネーイス』の中ではそれとは異なる展開が見て取れる。言い換えれば、トゥルヌスの己の武運についての自信には見誤りがあることが認められる。このことには二つの面があるように思われる。

第一は、上に見たような、fortuna は人の期待を裏切るもの、という表象との関連である。実際、勇敢に戦って命を落としたパッラースを悼んでアエネーアースは、

‘tene,’ inquit ‘miserande puer, cum laeta ueniret,  
inuidit *Fortuna* mihi, ne regna uideres  
nostra neque ad sedes uictor ueherere paternas?  
non haec Euandro de te promissa parenti  
discedens dederam’ (11.42-46)

「そなただけは別なのか、憐れむべき少年よ。上機嫌で来ていた運の女神も惜しむのか、そなたがわが王国を目にすることも、父上の居城へ凱旋の騎馬を進めることも。こんなことではない、そなたについての父王エウアンドルスとの約束は」

と嘆いた。運の女神は人が思い描いたことをそのとおりに実現することを往々にして許さない。その点で興味深いのは、トゥルヌスがドランケースの非難に応え、彼の提唱した講和を拒んで、主戦論を強硬に訴えるところである。

‘si tam deserti sumus et semel agmine uerso  
funditus occidimus neque habet *Fortuna* regressum,  
oremus pacem et dextras tendamus inertis.  
quamquam o si solitae quicquam uirtutis adesset!

\*13 Cf. Otto, A., *Die Sprichwörter der Römer*. Leipzig 1890 (Hildesheim/New York 1971), 144.

ille mihi ante alios *fortunatusque* laborum  
egregiusque animi, qui, ne quid tale uideret,  
procubuit moriens et humum semel ore momordit.

…

multa dies uariique labor mutabilis aevi  
rettulit in melius, multos alterna reuisens  
lusit et in solido rursus *Fortuna* locauit.’ (II.412–18, 425–427)

「われらを見限るにも、ただ一度の隊伍の敗走でわれらが全滅を喫し、運の女神も戻って来ぬ、というなら、講和を乞いましょう。なすすべなく右手を差し出そう。しかし、いつもの武勇がまだ少し残っていたとすればどうなのか。私に言わせれば、他の誰にもまして労苦により報われる者であり、傑出した魂なら、そのような目に遭うよりさきに必ずや倒れ伏して死ぬ。それを最期に土を噛む。…… これまで多くのことが一日でも、時の推移、苦難の変転とともに、よいほうへ転じた。多くの人々が去来を繰り返す運の女神に誑かされては、またもとの堅固な場所に置かれたことがある。」

「勇猛なる者を助ける」という言葉と同様に、いま劣勢でも、それがいつ優勢に転じるか分からない、運の女神の風向きは計り難く変化するから、というここでの議論<sup>\*14</sup> それ自体は格言的言い回しを踏まえているが、そのことはトゥルヌスの思惑どおりに事が運ぶことを意味しない。皮肉なことに、運の女神に誑かされるな、とトゥルヌスは主張しながら、女神の真意を見誤っている。

第二の面は、トゥルヌスが戦争の性格を見誤っていると思われることである。ユーノーがラティウムに戦争を引き起こした目的は、

‘non dabitur regnis, esto, prohibere Latinis,  
atque immota manet fatis Lauinia coniunx:  
at trahere atque moras tantis licet addere rebus,  
at licet amborum populos excindere regum.’ (7.312–315)

「ラティウムの王国から閉め出すことはかなうまい。それはそれでよい。ラー

<sup>\*14</sup> 運の女神についての「盲目」、「車輪」、「移り気」といった常套的、ないし、格言的モチーフが織り込まれているが、通常は「抱擁した人々を盲目にする」(eos efficit caecos quos complexa est. Cic. *Amic.* 54)「授けたものをすぐに返せと求める」(cito reposcit quod dedit. Publil. Syr. 295 (Sentent. L 4))というように、幸運を与えてから取り上げる、与えた幸運で判断力を鈍らせる、というものである (cf. Otto, op. cit. (n. 13), 141 ff.) のに対し、トゥルヌスは逆運から幸運への変化を思い描いている点が特異である。

ウィーニアが妻となることも運命により動かしえぬ定めだ。だが、事態を引き延ばし、この大事業に遅滞を加えることはできる。両王の国民を根絶やしすることはできない」

と言われるように、アエネーアースが戦いに勝利し、それによってトロイアとラティウムの民を統合してラーウィーニウムの都を築くことは動かないが、その代償として両国民に多大な犠牲を払わせることにあった。ところが、トゥルヌスはトロイア陣営を包囲したとき、

nil me fatalia terrent,  
si qua Phryges prae se iactant, responsa deorum;  
sat fatis Venerique datum, tetigere quod arua  
fertilis Ausoniae Troes. sunt et mea contra  
fata mihi, ferro sceleratam excindere gentem  
coniuge praerepta' (9.133-138)

「私は運命の定めなど少しも恐れぬ、いかにプリュギア人が神々のお告げと吹聴しようとも。運命にも、ウェヌスにも、もう十分であろう、肥沃なアウソニアの田野へ着いただけで。それに立ち向かうのが私の運命だ。わが運命は妻を横取りした罪深き民を剣により根絶やしにすることだ」

と言う。ユーノーの言葉と響き合う語彙 (dabitur 7.312—datum 9.135; fatis 7.313—fatalia 9.133, fata 9.137; coniunx 7.313—coniuge 9.138; excindere 7.315—9.137) を用いながら、「根絶やし」の対象として、「両王の国民」(amborum populos regum 7.315)ではなく、「罪深き民」(sceleratam gentem 9.137)という言葉でトロイア人のみを挙げている点に相違が認められる。

この相違は、トゥルヌスの見誤りが、自分に武運があると信じていることだけでなく、戦場で犠牲を払うのが敗者の側のみと考えていることにあることを示唆するように思われる。この点で参照すべきは、まず第10歌、神々の会議でのユピテルの言葉であろう。

'quae cuique est *fortuna* hodie, quam quisque secat spem,  
Tros Rutulusne fuat, nullo discrimine habebo,  
seu fatis Italum castra obsidione tenentur  
siue errore malo Troiae monitisque sinistris.  
nec Rutulos soluo. sua cuique exorsa laborem  
*fortunam*que ferent. rex Iuppiter omnibus idem.

fata uiam inuenient.<sup>7</sup>

(10.107-113)

「各人の運が今日いかにあれ、いかなる希望を切り開くとも、トロイア人かルトウリー人かで決して区別はせぬ、陣営を包囲して封じ込めるのがイタリア人の運命であるにせよ、トロイアの悪しき迷妄と不吉な警告によるにせよ。だが、ルトウリー人を解き放ちもせぬ。各人とも自身の企てに応じて苦難も幸運も得るであろう。王なるユピテルは万人に公平だ。運命は道を見出すだろう。」

上に引いたユーノーの言葉が示すように、戦争の始まる前からトロイア軍が勝利を収めることは動かしえない定めであり、この定めを実現するのは他ならぬユピテルであるから、ここでの「運」がもし戦争の勝敗にのみ関わるなら、「万人に公平だ」というユピテルの言葉は実際の神の行為と整合しなくなる<sup>\*15</sup>。しかし、戦場では勝敗に関わりなく、敵味方双方から犠牲者が出る。実際、パッラースに死が迫るのを見て悲しむヘルクレスにユピテルが「人それぞれに定まった日は動かさぬ。短く、取り返しよのない時間をすべての者が生きる」(‘stat sua cuique dies, breue et irreparabile tempus | omnibus est uitae’ 10.467-468) と言って慰める箇所を比べ合わせれば、共通の語句 (cuique, omnibus) がすぐに目を引くのに加え、いずれにおいても「死は万人に公平に訪れる」という格言的モチーフ<sup>\*16</sup> が働いていることが認められる。

加えて、重要だと思われるのは、第 12 歌でアエネアースが「非情な無差別の殺戮」(saeuam nullo discrimine caedem 12.498) にかかったとき、詩人は「かくも激しく衝突させるのがよいと思われたのか、ユピテルよ、これらの民はやがて永遠の平和を保つ定めであるのに」(tanton placuit concurre motu | Iuppiter, aeterna gentis in pace futura? 12.503f.) と嘆きの声を発していることである。この戦いが終われば、トロイア人とルトウリー人は手を取り合って「ローマ建国」を進めなければならない。この事業を前に多数の犠牲を払うことは双方にとって大きな痛手となる。この点で、トゥルヌスの拳兵はトロイア人の根絶やしを意図しながら、自国の民をも害する行為とみることができ、そこに彼の見誤りが認められる。

そのように、ここでの戦争が自身を傷つける性格を有するとすると、次の二つの fortuna の用例はじつに興味深い。

‘quaenam uos tanto *fortuna* indigna, Latini,  
implicuit bello, qui nos fugiatis amicos?’

<sup>\*15</sup> Cf. Harrison, S. J., *Vergil: Aeneid 10*. Oxford 1991, ad loc.

<sup>\*16</sup> Cf. Otto, op. cit. (n. 13), 228f.

pacem me exanimis et Martis sorte peremptis

oratis? equidem et uiuis concedere armis.

(II.108-111)

「いかなる成り行きだ、不当ではないか、ラティウムの者よ、このような大戦を引き起こしたとは。そなたらが友であるわれわれを逃げているのだ。すでに息絶えた者、戦場で命を落とした者のため、講和をこの私から乞うのか。私は生きている者にでも和を譲ることを望んだらう。」

“o fortunatae gentes, Saturnia regna,

antiqui Ausonii, quae uos fortuna quietos

sollicitat suadetque ignota lacesere bella?”

(II.252-254)

『幸運なる民よ、サートウルヌスの王国よ、古きアウソニアの人々よ、いかなる不運がおまえたちの静謐をかき乱し、弁え知らぬ戦争に挑め、と促しているのか。』

一つ目の例は、激しい戦闘のあと戦死者の遺体を埋葬するため休戦の使者がラティーンヌス王のもとから遣わされたのに対し、アエネーアースが痛憤を示す言葉である。「友」(amicos 109) が敵とされ、それによってかけがえのない「命が失われた」(exanimis et Martis sorte peremptis 110) 次第について、「憤り」(indigna 108) を込めて fortuna という語が当てられている。二つ目は、加勢を乞うラティーンヌスの使者に対してディオメーデースが拒絶を示す言葉で、fortuna は、黄金時代のような平和を享受していたラティウムの民 (fortunatae gentes, Saturnia regna 252, quietos 253) がそれを捨て、戦争に駆り立てられた状況を指している。いずれにおいても、fortuna は人が人の命を奪う戦争の不条理を表わすのに用いられている。これを「狂気」(furor, furia) と同等視してよいとすれば、戦争を引き起こすためにアレクトーがアマータやトゥルヌスに狂気を吹き込んだこと (7.348, 350, 375, 377, 386, 392, 406, 415, 464; 625)、また、「戦争の門」の内側には、不敬な「狂気」(Furor impius 1.294) が座し、この門の開くときが戦争の始まり (7.601-615) とされることを比べ合わせることができる。

そこで、トゥルヌスが勇猛である自分を運の女神が助け、武運に恵まれると信じて拳兵したことについて、そう信じたことのみならず、そうして引き起こした戦争が「同胞」を傷つけることに思い及ばなかった点においても見誤りがあるとすれば、これらの例ではどのように Fortuna/fortuna が関わって見誤りを生じる事態の成りゆきそのものが fortuna という言葉で表現されていると言える。

しかし、トゥルヌスも自身の見誤りに気づくときがやってくる。まず、馭者に化けて彼の戦車をアエネーアースから遠ざけていたユートウルナの正体を指摘しながら、トゥルヌスは言う。

‘*quae iam spondet Fortuna salutem?*

uidi oculos ante ipse meos me uoce uocantem  
 Murranum, quo non superat mihi carior alter,  
 oppetere ingentem atque ingenti uulnere uictum.  
 occidit infelix ne nostrum dedecus Vffens  
 aspiceret; Teucris potiuntur corpore et armis.  
 excidine domos (id rebus defuit unum)  
 perpetiar ...?’ (I2.637-42)

「いま命の保証を与える運の女神がどこにいるのだ。私はこの目の前に見たのだ、私を呼ぶ声を上げながら、ムッラーヌスが——私が彼にまさって大事に思う者は他にない——命を落とすのを。巨体に大きな傷を受けて屈したのだ。不運にもウーフェンスも倒れた。それで、私の恥辱を見まいとしたが、その遺体と武具はテウクリア人らが手に入れた。家郷の壊滅、それ一つだけがこの事態にもまだ欠けていたのに、それすら耐え忍ぶのか。」

いまや運の女神は武勲どころか身の安全すら約束してくれないと言うほどにトゥルヌスの自信は失われた。大切な仲間の死を目の当たりにし、開戦時には、上に触れたように、「罪深き民を根絶やしにする」(sceleratam excindere gentem 7.137) ことを目指していたのに、いまは自身の「家郷の壊滅」(excindi domos I2.641) を差し迫った脅威として感じたことがトゥルヌスに自分の見誤りに目を向けさせている。さらに、

accidit haec fessis etiam *fortuna* Latinis,  
 quae totum luctu concussit funditus urbem. (I2.593-594)

このとき疲弊したラティウム軍にさらに不運が加わって、悲嘆により都全体を根こそぎ揺ることとなった。

という叙述で始まる女王アマータ自害の報を聞き、ラティーンヌス王の城市から炎が立ち上るのを目にして彼は言う。

‘quo deus et quo *dura* uocat *Fortuna* sequamur.  
 stat conferre manum Aeneae, stat, quidquid acerbi est,  
 morte pati, neque me indecorem, germana, uidebis  
 amplius. hunc, oro, sine me furere ante furorem’ (I2.677-680)

「どこへでも、神が、過酷な運の女神が呼ぶところへついて行こう。アエネーアースに戦いを挑む決意は固く動かぬ。いかなる厳しいことも死をもって耐える。私の

不面目が、妹よ、おまえの目に触れることはもはやない。その前に、頼む、この狂気のままに猛り狂わせてくれ。」

運の女神が背を向けていること (*dura Fortuna* 677) をトゥルヌスはいまにして (*iam iam* 676) はっきりと悟った。そして、自分がそれで命を落とすことになってもアエネーアースとの決戦に臨もうとすることを「狂気」(*hunc me furere furorem* 680) と呼ぶ。トゥルヌスが一騎打ちで犠牲になったとき、誰よりも悲嘆にくれるのはユートウルナである。その彼女に自分の覚悟を貫く許しを求めることには、戦うことのみならず、戦いがもたらす犠牲への自覚が窺える。これに続いて、

‘*parcite iam, Rutuli, et uos tela inhibete, Latini.  
quaecumque est fortuna, mea est; me uerius unum  
pro uobis foedus luere et decernere ferro.*’ (I2.693–695)

「もう手を引け、ルトウリー軍よ。ラティウムの兵も武器を納めよ。戦局を決するのは私だ。私一人に任せるのが正しいのだ、おまえたちに代わって盟約の償いをなすべく、剣で決着をつけるのは。」

とトゥルヌスが呼びかけるとき、ここには明らかに、戦いの終結が意図されている。「手を引け」(*parcite* 693) という指示は目的語を欠いているが、*Teucris* と *uobis* (= *Rutulis*) と両方を補うことが可能であろう。これ以上に相手方に損害を与えることも自軍から犠牲を出すことももう控えねばならない、という宣言であるように思われる。また、*quaecumque est fortuna, mea est* (694) は、上の引用では、ここで戦争全体の帰趨が決まるという文脈を重視して訳出したが、字義どおりには「どのような運のめぐりもすべて私の運だ」となる。いま決戦に向かうトゥルヌスの勇猛さは開戦時に劣らないと想像されるが、勇猛であれば武運に恵まれるという幻想はもはやなく、時の運に従う覚悟を示している。そこで、*fortuna* をめぐるトゥルヌスの見誤りがここでは、上に見た二つの面、勇猛さと犠牲のいずれにおいても、解消していることが認められる。

#### 4 結末場面での *fortuna*

上には、アエネーアース、ディードー、トゥルヌスの場合に主眼を置いて *fortuna* の含意とその表現を検討した。これを踏まえて結末場面を見直してみよう。

*cunctanti telum Aeneas fatale coruscat,  
sortitus fortunam oculis, et corpore toto*

eminus intorquet. murali concita numquam  
 tormento sic saxa fremunt nec fulmine tanti  
 dissultant crepitus. uolat atri turbinis instar  
 exitium dirum hasta ferens orasque recludit  
 loricae et clipei extremos septemplex orbis;  
 per medium stridens transit femur. incidit ictus  
 ingens ad terram duplicato poplite Turnus.  
 consurgunt gemitu Rutuli totusque remugit  
 mons circum et uocem late nemora alta remittunt. (12.919-929)

たじろぐ彼にアエネーアースは運命の槍を振りかざす。めぐってきた好機をその目に捉え、全身の力で遠くから投げつける。城攻めの投石器から発射された岩も決してそのような鳴動を起こさず、雷電にもそれほどの大音響が弾けはしない。黒い竜巻のように宙を飛び、槍は忌まわしい破滅を運んだ。鎧の端と七層の盾の周縁を切り裂き、腿の真ん中へ唸りを上げて突き刺さった。この一撃にトゥルヌスは膝を折って巨体を大地に沈めた。ルトゥリー人は嘆息を吐いて立ち上がる。それに周囲の山全体が反響し、嘆声が森深くに広くこだまする。

このとき、トゥルヌスはディーラによって戦う力を奪われていた。その「好機」(fortunam 920)をアエネーアースは見逃さなかった。「運命の槍」(telum fatale 919)が天空を揺るがしながら「破滅を運び」(exitium ferens 924)、トゥルヌスを大地に沈めた。腿の真ん中を貫かれた傷は、叙事詩の平行からも現実の病理に照らしても<sup>\*17</sup>、致命傷のはずであると考えられる。そして、彼の死を見て取ったかのように、ルトゥリー人も周囲の山野一帯に響き渡るような嘆きの声を上げる。ここまでの叙述においては、そのすべてが「終わり」を指し示しているように見える。その点では、上に引いたように、この一騎打ちを前にトゥルヌスは「どのような運のめぐりもすべて私の運だ」(quaecumque est fortuna, mea est 694)と言って決着を目指していたのであるから、アエネーアースにとっての「好機」はまたトゥルヌスの「武運」とも重なっているように思われる。実際、このあとの嘆願においてトゥルヌスはまず「私が自分で播いた種だ。泣き言は言わぬ。おまえもこの機を逃すことはない」(equidem merui nec deprecor. utere sorte tua. 931f.)と言う。utere sorte tua (932)が sortitus fortunam (920)と呼応しているとすれば、いまアエネーアースが下す処

<sup>\*17</sup> 即死とはならないが、止血できないかぎり（この場合、想像される傷の大きさ、深さから不可能）、数日のうちに失血死する。平行について、cf. 10.588-590, Hom. *Il.* 16.307-311. また、拙稿 (n. 2)、注 (19) を参照。

断をトゥルヌスは自身の運として受け入れていると見られる。

そこで、ここに「終わり」、言い換えれば、トゥルヌスの死が示されているとすれば、あらためて問われねばならないのは、なぜ彼は「命乞い」とも見える嘆願 (*supplex dextram precantem protendens* 930f.) をしたのか、その目的である。

彼の求め (*oro* 933) は、老父ダウヌスへの憐れみを乞うたあと。「私の体を、そうしたいなら、命の光を奪い取ったあとでもよい、わが一族に返してくれ」 (*me, seu corpus spoliatum lumine mauis, | redde meis* 935) という言葉で身柄返還に及ぶ。この言葉が「命の光を奪い取ったあと」に主眼を置いているとすれば、それは遺体返還と彼の一族による葬礼を意図していることになる。想起されるのは、『イーリアス』において、アキッレウスが単身やって来たプリアモスの求めを容れてヘクトールの遺体を返し、彼の葬礼をもって詩全編が結ばれる展開である。そのような「終わり」はトゥルヌスが求めるところとしてふさわしいものに思える。ただ、「葬礼」はまた『アエネーイス』全体を通じてきわめて重要なモチーフであるので、稿をあらためて詳細に検討する必要がある<sup>\*18</sup>。いまは、葬礼が「終わり」と平安に通じるものであるのは疑いないことのみ記しておきたい。

トゥルヌスは次に、アエネーアースの勝利と自分の敗北を認めた (*uicisti et uictum tendere palmas | Ausonii uidere; tua est Lauinia coniunx* 936f.<sup>\*19</sup>) あと、「これ以上は憎しみに走るな」 (*ulterius ne tende odiis* 938) という言葉で嘆願を結ぶ。ここにも「終わり」が意図されていることは、これが「ユーノーの和解」に際してユピテルが女神による「遅延」を終わらせるべく「これ以上の企ては私が禁ずる」 (*ulterius temptare ueto* 12.806) と申し渡した言葉との対応<sup>\*20</sup> からも窺える。この「終わり」が戦争の終結を意味することは自明であろうと思われる。そのうえで、*fortuna* をめぐるトゥルヌスの見誤りには戦争がもたらす「同胞」の犠牲という面があったことに注意したい。決戦に臨む前にトゥルヌスはその誤りに気づいた一方、敗北を認めたいま、自身にはどのような処遇も受ける覚悟がある。とすると、彼がアエネーアースに対して憎しみを終息させるよう懇願するとき、

<sup>\*18</sup> 第4歌でのディードーの死、第5歌でのアンキーセースの法要、第6歌でのミーセーヌスの葬儀、パリアルスへの埋葬要請、マルケッルスへの供養、第7歌でのカイエータへの葬礼、第11歌での戦死者の野辺送りなどの他、とくに注意したいのは、「不利な講和条件のもとに己れの身を差し出したとき、王国も望ましい光も享受できませぬよう。時いたらずに倒れて、砂地のあいだに埋葬もされませぬよう」 (*nec... regno aut optata luce fruatur, sed cadat ante diem mediaque inhumatus harena. 4.618-620*) というディードーによるアエネーアースへの呪詛である。ヘクトールへの葬礼を認めたことがアキッレウス自身も彼の運命として戦死したときに葬礼を受けられる (たとえば、パトロクロスが求めたように彼と同じ骨壺に納められる (Il. 23.91-92)) ことを暗示しているとすれば、ここでアエネーアースがトゥルヌスの嘆願を拒否したことはディードーの呪詛の実現を示唆するものなのかどうか、といった視点が立てられる。

<sup>\*19</sup> この言葉と戦争の始まりでの 9.135-138 (*cit. supra*) の対比にも注意。

<sup>\*20</sup> 拙稿 (n. 2) 101、注 (20) 参照。

その憎しみの矛先として想定されているのはトゥルヌス自身ではなく、むしろ、彼の「同胞」であると推測することができるように思われる。つまり、トゥルヌスはここで自分のためではなく、他の仲間のために嘆願していると考えられる。実際、アエネーアースの「破滅を運ぶ運命の槍」が彼の腿に穿った傷が致命傷であれば、そして、彼にその自覚があれば、あとに残る同胞のためを思うのは自然である。

このように見るとき、トゥルヌスの嘆願の目的は、自身のことよりも同胞を思い、戦争の終わりを願ってのことであったという理解ができるように思われる。しかし、アエネーアースはトゥルヌスの嘆願を自分可愛さの命乞い、「遅延」の詐術の一つと断じて止めを刺したと見られることについては先の拙稿に論じた。アエネーアースがそれ以上の「遅延」を阻もうとしたのは、トゥルヌスの嘆願の目的と同じく、戦争の犠牲をこれ以上に増やさぬためであった。ここには深い悲劇的皮肉が認められる。

最後に、この皮肉の表現にあずかって、ここでの fortuna が作品全体に展開されたその含意を反映しつつ機能していることを述べて本稿を閉じることにする。第 I 歌でのウェヌスの嘆きが端的に示したように、アエネーアースにとって fortuna はまづもって英雄がその中で生き続けなければならない苦難の状況であり、その終わりの到来がいつねに願われるものであった。その点で、結末場面で英雄が認めた好機は目の前の戦争のみならず、トロイア陥落以来のすべての苦難に終わりをもたらしうる好機であったと見られる。その一方、運の女神や武運は人の期待を裏切るものであり、アエネーアースはそれを知って果敢な行動に出ることを戒めていた。その点で、結末場面で英雄が好機を捉えて「運命の槍」を投じたことはそれまでの慎重な態度から一歩踏み出した行為と見られる。その判断に誤りはなく、槍は好機にふさわしく目標を射当てた。問題は、しかし、これが「終わり」をもたらす好機であるという認識を自分とともに相手のトゥルヌスも共有していることにアエネーアースが想到しなかったことに認められる。ディードーの場合、アエネーアースと共通する fortuna の経験が彼女に英雄の窮地に支援の手を差し伸べさせ、悲劇は終わりのない英雄の fortuna に対して彼女の fortuna の完了という形で現われた。この悲劇についてアエネーアースは「思いもよらなかった、私の出発がそなたの心にこれほども大きな痛みをもたらすとは」(non credere quibus | hunc tantum tibi me dicessu ferre colorem 6.463f.)と語っている。結末場面でアエネーアースがトゥルヌスの嘆願を誤解したとしても不思議はない。その場合、この誤解によってトゥルヌスに止めの一撃を加えたことで「好機」を逸することになったとすれば、これまでの慎重さと裏腹に、アエネーアースは期待を裏切られたことになる。実際、止めを刺すときの英雄は「燃え上がった狂気と怒りも恐ろしく」(furiis accensus et ira | terribilis 12.946-947)と描写される。戦争を終結させようとした意図と裏腹に、トゥルヌスを戦争へ駆り立てた狂気を帯びているのである。上にも引いたよ

うに、戦端を開いた狂気を「いかなる成り行きだ、不当ではないか、ラティウムの者よ、このような大戦を引き起こしたとは」(‘*quaenam uos tanto fortuna indigna, Latini, implicuit bello?*’ II.108) とアエネーアースは非難したが、いまはアエネーアースの狂気と怒りの前に失われたトゥルヌスの命は「不当と憤った」(*indignata* II.952) と語られる。戦争は *fortuna* をめぐるトゥルヌスの見誤りとともに始まり、続けられてきたが、それが終わろうとする「好機」にアエネーアースとトゥルヌスは立場を入れ替えたかのようにすら見える。ここにまた期待が *fortuna* によって裏切られたことが暗示されているとすれば、それは同時にアエネーアースに「終わり」は訪れず、なお英雄が苦難を生き続けなければならないことを示唆するように思われる。

(京都大学)